

小學校の擔任伊藤先生

兒玉 稔

七十餘年の昔、余はある都市近郊の小學一年三組の兒童、クラス擔任は若き伊藤美和子先生なりき。余、入學の前年に同地に轉居、未だ知己無きまま入學す。その事情を知り給ひてか、伊藤先生、余に對し陰に陽に格別の思ひ遣りを掛け給ふ。そは子供心にも感ぜられたり。

その後十数年、余、大學生の時、アルバイト先の都合にて静岡縣奥地の山村に出向くこととなれり。事前に同所地理チェックの折、何となく馴染みある地名を見出しぬ。備忘住所録と突合はすに、かの伊藤先生が住み給ふ地と知りぬ。(先生はその後、電力會社技師に嫁ぎ給ひ、その夫君、偶々、當該地の水力發電所に轉勤せらるればなり。)懐かしき急につのり、この機會に先生を訪ねむと欲す。かつての親切の御禮を申上げ、無事に成人したる姿をお見せせむと思へばなり。

當時の輕便鐵道、今は觀光ST列車走る大井川鐵道にて川邊を遡ること二時間弱、無人驛に着く。居合せの村人に尋ねればその社宅、至近の距離にあり。仕事の前に先生を訪問のこととす。前觸れも無く突然お邪魔する非禮を思ひ、もしやご不在にて會ふを得ざることありやと案じ、首尾よく御目文字叶ひても教へ子數多ある中、「君のこと記憶に無し。」と仰せあらば如何すべきか、あれこれ心配しつつ行くうち、早やお宅に着く。

表札を確かめ、戸口にて「御免下さい」を發聲す。すぐ返事ありて玄關ガラリと開く。余の姿を認むるや、意外にも「あら、兒玉君！」とさしたる驚きも無く、昨日にも會ひしが如きのご對應にて、當方こそ呆氣に取られ、道すがらの不安、瞬時に消え失せにけれ。座敷に通されその後の小學、中學、高校、大學生生活等をお話申上ぐるうち、先生、以下の事を仰せ給ふ。

『自分には貴方に謝罪すべきことあり。それを果たす機會無く、長らく氣にしをり。

貴方を擔任の年の秋、學校行事學藝會あり。當時は校内のみならず住民一般の關心高き一大イベントにして、一年生の演目これ「足柄山の金太郎」なりき。擔任教師として、貴方には主役たる金太郎の役を既に配してあり。

それを聞きつけしある住民、異論を學校に寄せり。曰く、校區に新參の兒童に主役を配分するは問題あり、むしろ有力者某氏の子息を金太郎にすべしと。校内紛糾す。自分はそれ理不盡とし、大いに辯じたれ

ども経験淺き若き女性教師の意見は重きをなさざりき。頭ごなしにて主役變更に決することとなれり。貴方は金太郎に替へて、その引立役たる猿の割當てとなりぬ。

貴方に「猿を、」と告ぐるは擔任たる自分の役割。その時、事情知る由もなき貴方は「うん。」とのみ言ひ微笑みて頷けり。その顔、今も目に浮かぶ。

その晩、貴方に申譯なく思ひ、且つ横車に屈せる自分が不甲斐なく、寢床にて暫く泣きにけり。』

かくの如き話、余が身には思ひもよらざることなりけり。學藝會の役が何にてもあれ、余、今一顧だにせず。ただ、本件をこの時に至りたるまで心の引掛りとし給ひたる先生のお心持を心底有難く存じ奉る。

……
かつて「教師は聖職」と世に言へり。實にその通りとなむ思ふ。

(令和六年十月二四日受附)